
少し変わった人たちの平凡な日常

石水 早也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

少し変わった人たちの平凡な日常

【Nコード】

N9941H

【作者名】

石水 早也

【あらすじ】

今まで、さしたる波乱もなく平凡な人生を歩んできた主人公。平凡で普通な日常に嫌気が差していた彼だが、少し変わった人たちと出会うことで、徐々に『平凡な日常』に対する考えを変えていく。

ブログ

『平凡な人』。『普通の人』。この言葉を言われて喜ぶ人間がどれだけいるだろうか。

『平凡』、『普通』という言葉は、たいていの場合、マイナスに捉えられがちだ。

特に俺を含め、ティーンエイジャーの男子にとっては、周りとは違う『特別』『非凡』であることは、『もてる』ことに匹敵する至上命題だ。

『平凡な日常』。

毎日、毎日、取り立てて何事もなく、一日が終わる。

この眼に見えない檻に囲まれた人生に、飽き飽きしてる人も多いだろう。

『刺激』が欲しい。『特別』でありたい。

かくいう俺も、あいつらに出会うまではそう思っていた。

今は違う。

『平凡』であることは、不幸ではない。

『普通』であることを苦痛に感じることはないのだ。

『平凡な日常』にこそ、幸せがひそんでいるものだ。

ただ気付いていないだけで。

幸せは日常に転がっている。

そして、こういう言い方をしてもいいかもしれない。

自分にとっては、『平凡な日常』でも。

それは、他の人にとっては『特別な、特殊な、奇妙な日常』かもしれないということ。

少し見方を変えるだけで、『平凡な日常』は『特別な日常』に変えることができるのだ。

天立つ少女

あまたつ
とも
天達 友。

通称 ともだち。(嘘です。あまり定着してない。)

15歳。

身長165cm。体重45kg。強靱な精神力としなやかな筋肉。

帰国子女で、トワイリングガル。

両利きで、スイッチヒッター、絶対音感という抜群の器用さと

100mを10秒台で走る運動能力と、12歳にして、アメリカの大学を主席で卒業するほどの明晰な頭脳を誇る。

そして、見るものに与える心理的影響まで考慮して切り揃えられた髪型をもつ完全無欠少女。

そんな人間がこの世にいたなんて1週間前の俺は想像もなかった。

彼女は、どの運動部、文化部からもひっぱりだこ。

しかし、彼女が選んだ部活は……『帰宅部』だった。

『帰宅部』それはおそらく我が校、いや全国で最も多くの学生が所属している部活動であることは間違いない。

全国最大の競技人口を誇る部活動であるにもかかわらず、

最も知名度が低い部活動であり、いまだかつて大会なるものが開催されたことはない。（当たり前だ。）

試験期間中は、『部活禁止』ゆえに『帰宅部』は『帰宅禁止』なんていう冗談は、

誰もが一度は考えたことがあるだろう。（そうか？）

「みんなは気付いてないのね。帰宅には、青春で、いや、人生でもっとも大切なものがあるのよ。」

「なんだよ。それ。」

「月曜日、少年ジャンプを立ち読みすること。これ以上に大切なものがこの世にあるの？」

「おれ・・・お前とはいい友達になれそうだよ。」

眠れる授業

『月曜日』『五時限目』『国語』。

俺はこの時間帯を『睡魔刻』（すいまがどき）と呼んでいる。

この時間帯には、いつも時間を跳躍したかのような錯覚を覚える。

俺は、この五時限目を『五次元目』と心の中で変換している。

まあ、五次元のこと深くは知らないんだけど。

何故、俺がこの時間帯を『睡魔刻』と呼ぶのか。

それはこの時間帯は三つの睡眠を誘発する条件が重なった『絶対睡眠誘発時間』だからである。

条件その1『月曜日』。

多くの学生は、いまだ土日の余韻から覚めきれておらず、頭の中は、放課後のことではいっぱいだ。授業になんて集中できるはずもない。

集中力の散漫は、自ずと、睡魔を招く。

条件その2『五時限目』。

昼休みが終わり、胃の中で、丁度、昼食が活発に消化され始めた頃だ。血液は、脳ではなく、腹に集まるため、生理学的観点からも、

この時間帯は、一日の中でもっとも眠くなるのである。

そして何よりも厄介なのは、条件その3『国語』だ。

国語を担当するのは、中山ティーチャー。

彼の喉から発せられるテノールボイスは、鼓膜に心地よく響き、聞くものの心に安らぎを与え、眠りへと誘う。

中山ティーチャーは、『プリン』（ポケモン）だの、『大王ガマ』（ドラクエ）

だの『人を眠らせること』を得意とする数多くのモンスターの名が冠せられている。

そして、彼の授業で眠らない生徒は、『ラリホー』に耐性をもっている『腐った死体』という称号を獲得することができるのである。

……もつとまともな称号はないのだろうか。

とにかく、『月曜日』『五時限目』『国語』という3つの条件が惑星直列のごとく奇跡的に揃ったこの状況で、

ただの一瞬も、意識を持ってかれない人間は、いない。

唯一人を除いて。

我が校が全世界に誇る才女、天達 友は、後ろの席になろうが、一番前になろうが、一瞬たりとも、意識を授業から外すことはない。

それは、この『睡魔刻』であろうと例外ではない。

「わたしがなんで眠くならないかって？そんなの簡単よ。」

「簡単なら苦労しないって。」

「はい。予備のこれ。あなたにあげるわ。」

「……なんだこれ。耳栓？」

「眠気を誘う声なら……、聞かなければいいのよ!!」

「……まさにコペルニクスの転回。コロンブスの卵的発想。」

「いや……聞こえなかったら、授業の意味ないだろ。」

「唇の動きと、表情をよく見るの。そうすれば、おのずと先生が何を言っているか、何を考えているかが分かるようになるわ。」

「なるほどね。読唇術と読心術ってわけね。できるか!!」

「きゃふん。……耳栓をぶつけられたのは生まれて初めてよ。」

「俺も初めてだよ。耳栓を人に投げつけるテンションになったのは。」

「……麗らかな7月の午後。」

昼休み終了5分前の出来事であつた。

ある日の放課後

ホームルームが終了し、多くの学生にとって待ちに待った放課後が訪れた。

ほとんどの学生は、部活動のため、部室に向かう。

いわゆる帰宅部と呼ばれる無所属の学生たちは、教室でだべったり、早々と街に遊びにでたりと人それぞれだ。

勉強に熱心な学生は、塾に行ったりするのだろう。

天達 友の場合は、どうなのか。

「付いてくるの?」

「興味あるんだよ。天達がどんな放課後を送っているのか。」

「それは愛の告白と捉えていいのかしら?」

「なんでそうなる!!」

「放課後、一緒に帰宅することは、私にとっては付き合うことと同義なの。」

「・・・じゃあ・・・告白ってことにしようかな。」

「丁寧に断らせていただくわ。」

「丁重に断られちゃったYO!!」

「冗談よ。」

「冗談かYO!!」

俺のほうは、半分本気だったりしたんだけどな・・・

てか、どれのことをさして冗談っていつているんだろう。

天達の言葉は、冗談と本気の区別がつかない。

自分を遥かに超越した人間の心理を理解することは、人類が、宇宙の真理を理解しようとするること

同様に達成困難なことなのかもしれない。・・・オーバーすぎるか。

「付いてこれるものなら、付いてきてもいいわよ。」

「？」

「今日は自主練だし、ちょうどいいわ。」

「・・・まさか。本当にあるのか。『帰宅部』。」

「あるっていったらどうする？」

「どうするって言われても・・・」

「入部できる素質はありそうだけど、まだまだ足りないわね。」

「……足りないって何が？」

「足りないものが多すぎて一言じゃいえないけど……あえて一つ挙げるとするなら『情熱』かしら。」

「『情熱』ねえ……」

『情熱』。

青春に最も必要なものの二つ。それを面と言われて、足りないっていわれると少々キツイが、思わないこともない。

部活に所属していない（一応、幽霊部員として所属はしてるが）し、恋愛もしてないし、勉強熱心なわけでもない。

目標がない人間は、情熱をぶつける対象がないのだ。情熱は自ずと失われていく。

「私についてこれたら、入部を認めるわ。」

「ええ！？」

別に入部したいとか言っていないんだけど……

「よーい。」

「ちよっ……まっ」

「どん!!」

掛け声と同時に、疾走する天達。

「おい!!」

俺はなんだかよく分からないまま、必死に後を追う。

「速い!!」

みるみるうちに天達と俺との距離は開いていく。

彼女の100m走のタイムは10秒89。公式の大会に出場しないため世間的には無名だが、

この記録は、世界女子ジュニア10傑の記録に匹敵する。

学校指定の革靴を履いているとは思えないほど軽やかに

そして、足音もなく静かに走る天達の姿は、まるで猫のようだ。

どうすれば、そんな風に走れるんだよ。

しかし、俺も走るのには自信があるのだ。100m走のタイムは、14秒00。

・・・凡人のなかじゃ速いほうなんだって。

「足の速さは、及第点といったところかしら。じゃあ、これはどうかしら。」

袋小路に入り、彼女の眼前に4 m程の壁が立ちふさがった。・・・
今度は何をする気だ？

「はっ！！」

彼女は右足を壁にかけたかと思うと、そのまま壁を疾走し、一気に上まで駆け上った。

「いいいいいい！！」

・・・現実に可能だったんだ。あの技。キャプテン翼の立花兄弟、ロックマンの得意なあの技。

当然俺にそんな芸当できるはずもなく、壁の前で立ちすくむ。

「さあ、早く。」

「無理！！」

「諦めたら、そこで試合終了よ。」

「そもそも試合してないよ！！」

時計をちらりと見て、彼女はこう言った。

「時間切れ。ゲームセット。今回はあなたの負け。『負けたことがある』というのがいつか大きな財産になる』わ。じゃ。また明日。アスタ・ラ・ビスタ！」

なぜかスペイン語でさよならと言った後、彼女は去った。

「……あいつ、本当にジャンプが好きなんだな……」

でもネタ古いな。今の世代分かるかな。スラムダンク。

狐につつまれた気分のまま、俺は今日発売のジャンプを軽く立ち読みしたあと、購入して帰路に着いた。

夕食を終え、机に向かうが一向に宿題が進まない……。あいつのせいだ。

P M 10 時、俺は宿題が進まないことを人のせいにし、

今日起こったことと、明日話したいことに思いをめぐらせながら、早々と眠りについた。

曇りのち雨

本日の天気は、曇りのち雨。降水確率は50%・・・のはず。

「・・・雨っすか。」

土砂降りになった。それはもう、洪水警報がでるんじゃないかと思えるほどに。

傘を持ってこなかった自分が悪いんだけどね。あえて天気予報に対して文句をいいたい。

降水確率50%って、要は五分五分ってことだよね？それって予報っていえんのか？

俺は下駄箱の前でしばらく立ち尽くしていた。

「傘を持ってこない貴方が悪いのよ。」

「うお!？」

天達が背後から、急に話しかけてきた。気配を消して人の後ろに立つなよ！

「傘を持ってこない貴方が悪いのよ。」

「それはもう分かってるよ。二回も言うな。」

「今朝の湿度と、雲の動き、風向きで雨が降ることは、火を見るよ

り明らかじゃない。」

「お前は、漁師か!!」

「さあ、このままずぶ濡れになって帰るか。雨が止むのを待つか・
・どうするの?」

「うん。」

この雨は、ちょっとやさつとじゃ止みそうにない。夕方から見たい
ドラマの再放送があるんだが、これじゃあ無理だな。

仕方ない。図書室で時間を潰すか・・・。

「止むまで待つわ。それじゃあ、また明日な。天達。」

「あなたには、まだ選択の余地があるわ。そんなに簡単に諦めるの
?」

「選択の余地・・・あるか?」

「あるわよ。ほら、ごらんなさい。」

「ん?」

「雨がさつきよりは小降りになってるでしょう?」

「さつきよりはな。それで?」

「雨粒の一粒一粒を見極め、隙間を掻い潜れば、濡れることなく帰

ることができるわ。」

「お前は、子供の頃の俺か！！できるわけねーだろ！！」

「まあ、普通そうよね。私でも10秒以上は無理なもの。」

「嘘つけ！！そもそも物理的に無理だろ！！いいんだよ。雨が止むまで待つよ。」

「見たい番組があるのでしょ。諦めるの？」

「なぜ、その事実を！！だが、無理だろ。この雨じゃな。」

「諦めたら、そこで試合終了よ。」

「……………そうだな。」

ここで安西先生の歴史に残る名台詞ですか……

「ここに一本の傘があります。さあ貴方ならどうする？」

天達はそういうと、一本の傘を傘立てから抜いた。

女の子が持つような、可愛いピンク色の傘だった。

……意外だ。天達のことだから、もっとサラリーマンが持つような傘だと思っていたが……。

「その1、この一つの傘を巡る血で血を洗う戦いをする。」

「おいおい！！」

「その2、傘を破壊し、運命をともにする。」

「んなことするか!!」

選択肢は、徹頭徹尾、少年漫画だった。

「それなら、残された選択は唯一つね。」

「・・・なんだよ。」

「その3、私と一緒に傘に入り、帰る。」

「・・・え？」

「どうする？」

うつ・・・なんで、こんなラブコメみたくなってんだよ。

どうする。俺。どうする。

やっやばい。心臓の動悸が早くなってる。

顔赤くなってないか。

「いや、どうするっていわれても。」

天達は黙ったまま、俺を見据えている。

表情からは、相変わらず、何を考えているかわからない。

「なっ・・・なら、ええつと、さっさ・・・」

「時間切れ。それじゃあ、また明日ね。」

「チャオ！」

「ちよつとー!!」

天達は、そのままゆっくりと傘を開いて、出て行った。

うん。ドラマは諦めよう。

俺は、図書室に向かい、時間を潰すことにした。

その一時間後、洪水警報が発令し、俺が家に着いた時は、深夜0時を回っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9941h/>

少し変わった人たちの平凡な日常

2010年11月6日13時37分発行